

小田原史談

第 132 号

発行所 小田原史談会
小田原市南町 2-3-21

大正十一年四月の小田原駅前

出迎えの町民や小学生の列。駅前には緑門が、道の両側には日英の国旗が立っている。

イギリスのウェールズ皇太子の歓迎風景である。

前年の皇太子殿下の訪英に対する答礼をかねて、大正十一年(一九三三)四月十二日來日されたが、「薄曇りの廿三日……午前十一時十五分横浜駅を後に小田原に向かわれた。お召し列車が小田原駅についたのは午後零時廿五分である。駅前にお出迎えた小田原在郷軍人の関海軍機関少将その他十数名に一々軽き握手を賜い、駅頭からオーバーを召されて、東伏見宮殿下の自動車に御同乗、お祭騒ぎのような沿道の英国旗入波の中を天神山の関院宮御別邸に成らせられた」(『英皇太子殿下御來朝記念写真真帖』東泉院 岸達志氏所蔵)

ところが『富士屋ホテル

八十年史』をみると、些細なことだが、日にちと行先が食い違っている。

「四月廿一日、英国ウェールズ皇太子、箱根遊覧のため湯本岩崎別荘に御到着。同御宿舎に御滞留。廿三日は小田原関院宮御別邸に御成り」

しかし、この違いより駅前の情景のほうが興味深い。

緑門の左手の松は、県立小田原中学校の跡地の名残り、戦後まであったと思う。先導車の前後に轍のような線がみえるが、小田原電気鉄道(現箱根登山鉄道)の軌道であろう。上部中央に、細長く看板のようなものが見えるのは、今のスカイラーク・ビルあたりに位置した「カフェイ・レゾー

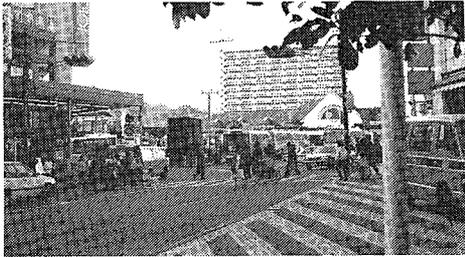
ト」で、一般に富士屋レゾー

トの名で記憶されている。

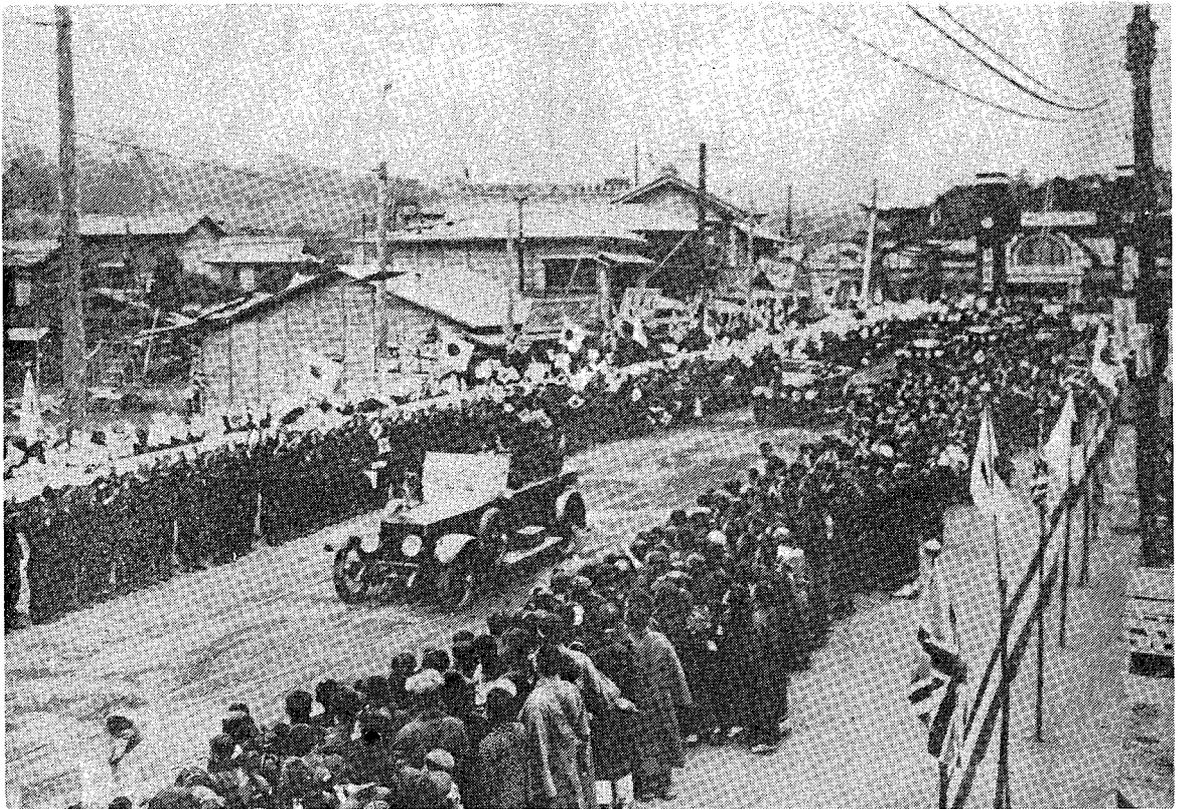
箱根来遊客の便のため、この年の三月オープンしたばかりで、一階が売店、二階

には百人が入ることのできる大食堂が設けられ、富士屋自動車小田原営業所と併用していたが震災のため倒壊している。駅が開設されて一年半経つものの、左手には空地が残っている。この頃小田原町の盛り場は松原明神を中心とする宮小路、青物町、本町であった。

(澄)



昭和六十三年一月撮影



私どもは昨年二月入生田の有料老人ホーム長壽園に、東京を離れて入居した者です。私も二人は小田原井細田御出身の故早野柏蔭先生の門下であります。不思議な御縁を感じないわけには参りません。そして、今ここに恩師の御生涯を小田原の皆様にお伝え出来ます事は限りない喜びであります。

早野先生は安政二年乙卯の年(公曆十二月二日)に小田原藩主大久保侯の家臣坪田元長氏の次男として生れられました。母は、和田美佐子と申されました。幼名は善次郎、名は元光。翠巖・全吾眞の号を持たれました。柏蔭は師の川尻先生からいただいた居士号です。九歳の時、木村利右衛門に就いて剣術を学び、十歳の時、堀左衛門に就いて四書の一『大学』の素読を受けました。

慶応元年(八六〇)、十一歳の先生は藩校に入學して学ばれ、其のかたわら砲術の師に就いて射術を学ばれました。其の後水田良温に算術を、中垣齋に経書を学ばれました。書道の師は有名な巖谷一六(小波の父)ですが、これは東京に出られてからの事と存じます。

明治六年(一八七三)、全国

に小学校が設立されるに当り、先生は平塚新橋小学校の教員となられました。時に十九歳でした。併し翌年辞職して、其の後は中垣齋に就いて引き続き漢籍を学ばれました。明治八年、先生、早野利平の跡目相続をされ坪田姓から早野姓になられました。其の時、先生は軍人たらん事を志されましたが、父は許されませんでした。

私の兄弟子故山田敬齋居士(東京心学参前舎第十二代舎主)が編した『早野柏蔭先生事蹟』に次の如く記されております。

早野柏蔭先生

伊豆山格堂

「後来先生人に語って曰く、現今個性教育を尊重する、其の理も去る事ながら、予は元來武を好んで文に疎く、劍術射御は予の最も得意とする処なりと雖も、算数文章の如きは甚だ不得手とする所なりき。然るに父は幕末より維新の時勢の遷を見て、予に勉むるに頻りに算術の術を学ばせむを以てす。予父の命なれば従って刻苦勉学するに、算術も

遂に点竄を習得して、師として金看板を挙ぐることを得るに至り。然れば人其の志に依って、其の個性も替え得るものなりと宣い給いぬ」と。

先生が関孝和に始まる昔の代数学を学ばれ、人の師となり得る「金看板」を挙げる迄に到られた事は、筆者も昔の参前舎の室内で、故先生から親しくうかがった事でありませぬ。此の事は、其の後先生が上京されて宮内省の会計課に勤務された

も感じておりました。東京の下町の商人の息子の筆者、文弱の徒である私にとつて、先生は遙かに雲の上の存在でした。明治十一年(一八七六)十一月、先生三十四歳、初めて父母の膝下を離れて上京され、郷土の先輩、元足柄県令・宮内省内匠頭(内匠寮長官。宮殿その他建造物の保管・監守・建築・土木に關する事項を管掌する内匠寮の長官)城多董氏を頼り会計課に奉職し、且つ城多郎に寄寓して同氏から漢籍を学ばれました。城多氏は先生の大家人でありませぬ。先生宮内省奉職の当初、日給拾銭を支給されましたが、其の乏しき中を割き、弟元智氏の学費として毎月金式円を送られたそうでありませぬ。

川宮の各宮家も、資を賜つて此の仕事を贊助されました。そもそも事の始めは、川尻先生の道話会が山の手の或る場所で催されました時、谷干城はじめ二、三の者が看板を見て入場し、先生の道話に感激したのに依りませぬ。心学の事も川尻先生の事も知らない彼等は、へたな事をしゃべつたら突っ込んでやろう位の気持ちだったそうです。それが一っぺんで川尻先生に心服してしまつたのです。其の時川尻先生は四十代で、円覚寺管長今北洪川老師に就いて禅の修行に熱中しておられました。

明治十六年(一八八三)全十城、城多董、佐々木高行、土方久元、平山省齋等が主唱して、熊谷東洲(参前舎主)・三谷謙翁(今は無き深川自謙舎主)・川尻宝岑(参前舎社中)の諸師を聘して、東京市内各所に於いて、毎月日を定めて心学道話の会合を開くに当り、早野先生は上司城多氏の命に依り会務を掌られました。これが先生が心学に触れる機縁になりました。此の時、伏見宮・小松宮・北白

その当時の道話の形式は、「理談」の部はよくは分らないのですが、「実話」の孝子伝は涙を浮かべながら聞きました。周囲が無學な下町の商人ばかりの私にとつて、川尻先生は理想的人の間像でありました。先生は明治四十三年(一九〇七)七月末、沼津獨善全接心(禅会)の帰途、いつもの通り箱根塔の沢福住楼で静養されたのですが、八月十日連日の雨で芦の湖の水溢れて川津波を起し、早川に突き出た離れ座敷におられました川尻先生夫妻を、家ごとおし流しました。父は早速小田原にかけつけ、早野先生指揮のもとに死体捜査に当

りました。それは当時の大事件で、新聞の号外は「箱根の川津波、川尻宝岑夫妻溺死」と報じました。当時小学六年生の私の子供心に与えた衝撃も大きく、いまに忘れません。その塔の沢になりましたのも、実に不思議な因縁と存じております。

さて、前述の通り、西南の役で熊本城を守った谷十城將軍らが主催の心学道話会の幹事を勤められた早野先生は、初めて川尻先生を知り心学を知ったのですが、そもそも「心学」は、今「丹波聖人」と称されている江戸期の町人学者石田勘平(号梅巖。六五―一七四)

によって唱え出された、町人の道義向上を目ざした道徳運動であります。「心学」の称は梅巖の高弟で心学の大成者手島培庵に依って作られたもので、「心学」の「心」は本心の意です。梅巖は朱子学を学び、「性」を知れと叫びましたが、培庵は「性」を砕いて「本心」と表現しました。「心学」の「学」は研究よりも実践に主眼を置く意がありますので、「心学」は「心教」と称してもよいでしょう。心学は、本心を知り体得して、それに基づいて実践躬行する事を目的とするものであります。心理学ではありません。梅巖は市井の隠者黄髮禪の居士小翠雲に

師事して悟りを開き、其の体験が其の学の基調となっております。それ故心学は庶民禪たる性格を持つと言えましょう。しかも神道を尚び佛道をとり入れ、神儒佛三道を包谷し、諸十百家・衆技に至る迄「心の磨種」として捨つべきにあらずとする、非常に自由で包谷的な教えであります。(若波書店「日本思想大系」柴田実先生編『石門心学』。平河出版社『禅ブックス』5『禅と日本文化』に掲載の伊豆山格堂「禅と心学」参照。梅巖の著『都鄙問答』の加藤周一氏の現代語訳が中央公論社「日本の名著」18に収められています)

ところで早野先生は心学修行を志され、当時の心学所参前舎第八代舎主熊谷東洲先生に師事し「見聞四十八則」の手引きを受けられました。それは心学二代目手島培庵が作ったと言われている、門弟指導の為の禅の公案に類する問題であります。扇を門人に見せ、「扇が心」という主客一如の心境に導く「何物が見るぞ何物が聞くぞ」が第一則、「物いふものは何物ぞ」が第二則、「心を出して見せよ」が第三則といった調子のものでして、世間が「手島ざとり」と言いました。早野先生は四十八則の調べを忍びに了り、川尻先生にそれが容易に過ぎて不満である旨を語られましたところが、川尻先生は芭蕉の「冬籠りまた奇りそはん此の柱」の句を示し、此の柱の中に入って見給えと言われました。早野先生は懸命に工夫されましたが中々とれません。遂に川尻先生の勤めで其の師鎌倉円覚寺今北洪川禪師に師事しました。

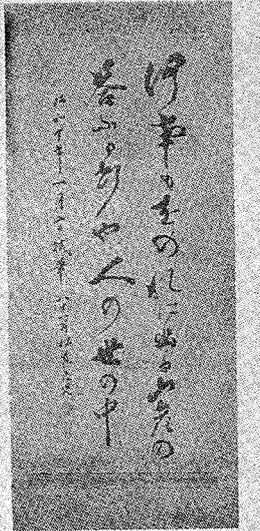
朝禪師に参禅して其の許しを得られました。此のように早く難関を透過されましたのは、やはり参前舎に於ける修行が前にあったからです。時に明治二十年(六六)八月でした。爾来宮内省勤務の帰りに川尻先生の日本橋若松町の御宅に立寄り参禅されました。

ところで明治二十一年一月に、川尻先生は洪川老師のもとでの十三年に及ぶ修行を終り印可を受けられたのであります。時に四十八歳でした。明治二十三年三月熊谷先生が亡くなり、次郎の長沼潭月先生も同年六月に亡くなられましたので、宝岑先生は其の後をうけて第十代の舎主になられました。五十歳でした。明治二十五年早野先生は参前舎の副舎主となり、舎に起臥して舍務を処理する事になりました。時に先生三十八歳。明治四十年七月、先生五十三歳、二十一年に近い室内修行を終り宝岑先生の法嗣とされました。

田相生町にありましたが、鉄道敷地となるにつき立ちのきを命ぜられ、一時東福田町に移りました。併し便利が悪い処なので新たに下谷区二長町五十二番地に講舎を建て明治二十四年十月に落成しました。翌年早野先生が参前舎に移り住まわれた事は前述しました。

参前とは「論語」「衛霊公篇」に、孔子に門人子張が、為政者の主張や政令が行われる方法を尋ねました時、孔子答えて言忠信行篤敬ならば蛮貊の邦でも行われるし、そうでなければ故郷の州里の範圍でも行われない。「立ちては則ち其の前に参なるを見る」云々とあるに依る語です。立っている時には「言忠信行篤敬」が眼前にハッキリと一体になっている位に熱心でなければいけないという事であります。

参前舎では毎月川尻先生を師家と仰ぐ静坐修行が催されました事は申す迄ありません。



何事もをのれに出る山彦の
答ふる聲や人の世の中

昭和十年一月二日試筆

八十一翁 柏蔭元光

早野元光先生、安政二年生、昭和十年没、小田原の人(社団法人心学参前舎第十一代会主)

明治二十四年四月、早野先生は師川尻先生の妹らしく子をとれられました。筆者は若年の頃其の夫人に何遍もお目にかかりましたが、おだやかなお方でいつもこやかに迎えて下さいました。

扨て、参前舎はもと外神

明治四十一年(二六)二月、宮内省御歌所長高崎正風男爵が一徳会を創立するや、早野先生は川尻先生と共に講師を依頼され各地で道話をされました。翌年二月十四日の夜、高崎氏の案内により川尻先生と共に逗子の有栖川宮別邸に参候

し、大妃殿下に道話進講の榮に浴されました。殿下御嘉賞あり、深更十一時に及んだと申します。

明治四十三年八月十日、川尻先生夫妻箱根塔の沢に於いて川津波により遭難されました時、小田原井細田宅に在られた早野先生は直ちに現場に到り、人夫を集め指揮して遺骸を求め善後処置をされました。川尻家には後継者がありませんでしたので、早野先生は苦心して川尻家親戚と謀りやがて養子夫妻を定められました。

會主を欠いた參前舎は直ちに早野先生を第十一代舎主に推しました。翌明治四十四年、先生は先師の事蹟を編み八日梓に上せ「川尻先生事蹟」として広く知友に頒たれました。

大正五年十二月、先生宮内省御用係の官を辞し、小田原井細田の宅に定住されましたが、是より専ら心学教化の事に従い、毎月上京して參前舎に於いて七日間の静坐修行の會を催して門弟を導き、且つ各所で道話をされました。先生が受講されました地方の會は、小田原心学道話會・沼津心学道話會・伊豆普門會等で、春秋二季に三日乃至五日、静坐會を開き、且つ道話をされました。小田原心学道

話會主催で大蓮寺外一ヶ寺を会場として夏季静坐會が催されました。後に石井裁縫女学校に会場が移りました。小田原高等女学校教諭森田花子・夏目得子両先生が毎回出席されました。

（岡先生は平生井細田の宅に參禪に行かれたと存じます）

私も数名は東京から馳せ参じました。大正六、七年の事でありませう。伊豆函南の臨濟宗円覚寺派養徳寺住職佐藤虎丘禪師は今北沢川管長門下であり、円覚寺派宗務総理や布教師の要職に在られたお方でしたが、深く早野先生を信頼され、自坊の外三島等各地の寺院を会場として先生をししばしはお招きして接心（静坐會）を催して下さいました。かなりの人々が入門して修行し、見性した人も少くありません。沼津や三島には其の当時の會員が今も多少残っておられます。

大正六年（一九一七）十一月、心学々祖石田梅巖先生に正五位が贈られました。先生は翌七年三月報告祭を行い、且つ「石田先生事蹟」抄録を編み世に頒たれました。石田先生事蹟は聖人と仰がれる梅巖先生の言行録で、正に石門心学の聖典と称すべき書であります。右報告祭の折、心学に関心深き

東京府立第五高等女学校長白石正邦先生が北条時敬先生をお連れ下さいました。

大正十年十月、早野先生は參前舎の組織を変更して社団法人とされました。大正十二年九月一日の関東大震災の折の大火災で參前舎は烏有に帰しました。社中も悉く罹災しました。然るに宮内省より建築用材が下賜せられ、内務省より復旧費として五千円が下附され、其の外地方有志社友の喜捨を得、これによって翌十三年十一月新たに堂々たる新講舎を完成する事が出来ました。それは禪の道場風の立派な物でした。

大正十三年二月、東京府立第五高等女学校々長白石正邦先生の西大久保のお宅で早野先生の道話會が催され、昭和四年頃迄続きました。山田敬齋或いは那須非石が前講を勤めました。白石先生は東大で国史を学び学習院に勤め乃木院長に仕えたお方でありませう。

大正十四年九月、早野先生は山田敬齋居士を随えて王子の北条時敬先生のお宅で道話をされ、昭和三年まで毎月一回続行されましたが、北条先生の御病氣により中止になったのでした。御家族や知友近隣の方々が集まられたそつでありませう。

北条先生は金沢の第四高等学校の数学教授として、後年の西田幾多郎博士を教え（先生の文集『廓堂片影』の編者は西田博士）続いて広島高等師範学校々長、仙台の東北帝国大学総長を勤められたお方でありませう。

円覚寺派管長今北沢川老師門下であり、參前舎の川尻先生とは同門でありませう。白石校長が北条先生を梅巖先生御贈位報告祭の折參前舎にお連れ下さったと前に述べましたが、元来北条先生は川尻先生に從つて心学の事は一応御存じだった筈と思ひます。

北条先生夫人藤子様は、翌大正十五年二月から早野先生に入門し二長町の舎に毎月通われました。夫人は松島瑞巖寺の松原盤竜老師から、門下の僧に先立って印可（免許）を授けられたとして騒がれた方ですが、広島では興國寺の瓊巖老師からも印可されたと伝えられています。諸老師に歴參された稀有な禪の女傑であります。思うに早野先生の毅然たる古武士的風格は禪僧とは一味ちがうものがあり、人を惹きつけたと思ひます。道話も川尻先生のような軽妙さは無く重々しい感じでしたが、それがズシリズシリと聴衆に食い込む力を持っていたと思ひます。

昭和二年六月、北条夫人を経て、小石川第六天町の徳川公爵家から、御後室美枝子様が早野先生の道話をうかがいたき旨の申し入れがありました。第六天の徳川家は慶喜公の令嗣慶久公のお家で、公の夫人美枝子様は有栖川宮威仁親王の第二王女であられました。御後室は盤龍師に禪を学ばれ、北条夫人と同門であられたのです。早野先生は毎月一度參邸して道話され、昭和八年三月、御後室薨去の前月まで継続しました。中頃から御後室の御依頼で早野先生は「臨濟録」を提唱され、道話は筆者の先輩で随一の山田敬齋居士が申し上げました。御後室は此の毎月一度の二人の參邸を樂しみにされていたといひます。

昭和四年の末、喜久子姫が高松宮家にお輿入れになりました。其の節早野先生の御発案で心学の「施印」(普、道話等の時聴衆に頒つた木版一枚刷、道歌や格言に絵を添えた物)を張り交ぜにした屏風を献上する事にしました。參前舎にありました施印の版木は震災で焼失しましたので、新たに西沢笛歌画伯に依頼して絵を揮毫して頂き、早野先生が道歌を添えた物を五葉作り、京都明倫舎にお願いし

同舎の施印をわけて頂き、これを溜塗縁で金銀の砂子を蒔いた屏風に散らし張りにして宮家に献上しました。実に適切な献上品で、御後室も大層お喜び下されたそつであります。これらの事が御縁で高松宮は心学に関心と理解を示され、其の御援助のもとに終戦後「石門心学会」が出来た次第であります。

教育史学者で大著『石門心学史の研究』(岩波書店)で学位を得られた故石川謙博士が研究の面を、早野先生のおとを継がれた參前舎第十二代舎主故山田敬齋先生が教化の面を担当されました。石門心学会は石川先生の令息松太郎氏が中心で現在も研究団体として継続存在し、機関誌『こころ』を引き続き刊行しております。初代の会長には住友の総帥小倉正恒氏を戴き、同氏歿後現在同じ住友の堀田庄三氏にお願いしております。

昭和四年、文部省は教化総動員の運動を起し、全国の教化団体を糾合して団体明徴、国民精神作興を企てました。參前舎も此の挙に加盟し、早野先生は七十五の御高齢ながら、東京・埼玉・神奈川・静岡・長野等各地で講演をされました。

昭和五年十一月二十六日、

昭和五年十一月二十六日、

早野先生は全国心学連合会の代表として、開講二百年祭を九段の東京市立第一中学校講堂で開かれました。事天聴に達し、心学二代目で教化組織を整えた大成者手島堵庵先生に対し、従五位贈位の恩命に浴しました。当日、一本喜徳郎宮内大臣、田中隆三文部大臣が祝辞を寄せられました。此の日集る者千数百人頗る盛会でした。

昭和十年六月八日、早野先生は上京され、東京府立第五高等女学校「私家なしの会」に出席されました。前述の如く白石正邦校長が心学熱心で、岩波文庫『手島堵庵心学集』を編集された事もあり、早野先生を尊敬しておられましたので此の会が作られました。昭和十年一月の事です。早野先生に御来校をお願いし、有志の教諭や生徒の為に道話をさせて頂くと共に静坐修行の指揮もして頂きました。六月八日、第五の「私家なしの会」をおえ、十一日には例年通り参前舎に於いて舎の初代中沢道二先生の御祭典を執行され、九日より十五日迄静坐会を開き門人の入室参禅を受け、『碧巖録』を提唱され、十六日に小田原に帰られ、六日に廿日夕、突然病起り同夜十時二十分歿し

れました。時に八十一歳。中島(小田原市中町)曹洞宗永昌院の先壁に葬られました。諡して覚樹院翠巖柏蔭大居士と申しました。先生の日常について『早野柏蔭先生事蹟』は次の如く伝えていきます。

「先生皇上を敬い給うこと最も厚く(中略)車を駆りて宮城内を通過し給う時、車の廓内に入るや、人知れず帽を取り形を正し給う。二重橋前にては少しく頭を垂れ謹みて居給う。神社仏閣の前を通り給うに必ず帽を取り給う。凡て事々しく表に現す事を為し給わず。用い給う紙の類も白き所は惜み給いて寸片と雖も捨てさせ給わず取り置きて役立て給う。旅行の折、汽車中にて弁当を求め給うに、必ず端より箸をつけ給いて、乱し食し給わず。剩りあれば家に持ち帰り食し給う。凡て五穀の類、妄りに棄て給わず、落ちこぼれし物を鼠雀の類に与え給う。衣服調度の類も丹念に用い給い、永く使い給えり。朝は未明より起出で給い、四隣の寝静まれる間に表を掃き清め、庭を掃除し給い、夫より嗽いし手水(洗面)して、先づ天照皇太神宮を拝し、先祖考妣(亡父母)を拝して食膳につき給い、一々拝して頂き給う。午前は机によりて読書し、講録を物し、

午後には畑に出でて耕作し給う。人の尋ねるあらば喜んで迎えて座敷に招じ談話し給う。凡て無造作にして拘わる事無し。」

先生御逝去一ヶ月後の昭和十年七月、慰靈祭が下谷二長町の練堀小学校で行われました。其の折、中央教化団体連合会長齋藤実氏(海軍大将・総理大臣)は弔辞で「至誠一貫、刻苦精勵世道の啓発人心の作興に尽粹せられる業績は心ある人士の齊しける敬服すると共に、故人の崇高なる人格と其の教化的功績を追慕して感無量」と言われ、文部大臣松田源治氏は弔辞で「道友六百名を超え、足跡海内に遍く、道話講演二千回に及ぶ」と言われました。また心理学者で社会教育家の高島平三郎先生は御出席下され「現代最後の古武士」と早野先生を評されました。私どももそういう感じを抱いております。

先生の高弟中沢道二先生が寛政三年(一七五二)江戸に下り神田相生町に開いた講舎で、町人は元より武士・大名まで先生の門に入り心学の最盛期を迎えた次第であります。『道二翁道話』(岩波文庫本は絶版。岩波思想大系京都明倫舎主柴田実先生編『石門心学』に初篇収録。宋の陸象山・明の王陽明の学を「心学」と称するものと区別する為め「石門」二字を冠します)は『鳩翁道話』(岩波文庫)と並ぶ名道話ですが、早野先生は文学性に富む「鳩翁道話」よりも、禅を深く修めた道二先生の道話を好まれました。早野先生が参前舎で講じられた書は四書・孝経の外は碧巖録・槐安国語・臨濟録・維摩経・毒語心経・四部録等の禅書でありました。先生若年時の剣道と儒・禅が先生の人格を作り上げられたのです。

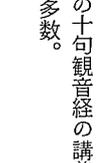
辱知の故陸川薫氏(堆雲居士)は「白隱和尚詳伝」その他数種の優れた禅書を残された稀有の大居士でしたが、遺著『真禅論』(昭和四三年。竜吟社)第六章師家論に於いて「今北洪川下の川尻宝岑居士及び其法嗣たる早野柏蔭居士などは実に立派な居士師家である。川尻、早野両氏は、石田梅巖より起れる心学を稟けた

る中沢道二を祖とせる参前舎の舎主即ち師家として終始したのであるが、居士師家としてはせめて是位の力量と人格及び学識が欲しいものである」(八六頁)と言われました。陸川先生は参前舎で早野先生に相見されていきます。此の不出世の大居士に其の人格力量を認められた早野先生を師に仰ぎ得た幸福を只今改めて感謝すると共に、郷土の方々が先生を認識されん事を切に望む次第であります。

因みに早野先生には著書無く、昔「心学の本質」という小冊子が参前舎から出たのみであります。尚、山田孝雄氏編『近代日本の倫理想』(昭和五十六年大明堂)に「早野柏蔭」の一文を寄せられました参前舎主田辺肥洲氏、及び副舎主小山止敬氏両氏から御協力を得ました事を感謝致します。(六三・一・三三)

著などを買い求めて差し上げた事があります。若い私などでもよきは分らなかつたのですから、老先生の理解は恐らく得られなかつたでしょう。とにかく儒禅で叩き上げた先生にも、当然の事ながら時勢を知ろうという精神がおりだつたのでした。長身の威風堂々たる早野先生のお姿が今なつかしい思い出されます。

因みに柏蔭の号は『無門関』第三十七に趙州禪師が禅の極意を尋ねた僧に対して「庭前ノ柏樹子」と答えた事に基つきます。柏蔭とは柏樹が天下の涼蔭(すずしいかげ)となる意です。柏は「かしわ」で無く、杉に似た葉を持つ大木です。建長・円寛にあります。筆者紹介 明治三十一年生。東京大学文学部卒。姫路、水戸高校(旧制)を経て茨城大学名誉教授で退官。著書『白蔭禪師の十句観音経の講義』その他多数。



粗稿

小田原とは
どういいう都市か(4)

石井富之助

内 容

- 一、北条氏時代の小田原(二二九号)
- 二、江戸時代の小田原(一三〇号)
- 三、明治時代の小田原(一三二号)
- 四、小田原駅開通から市制施行まで(本号)
- 五、終戦後の小田原(次号)

四、小田原駅開通から市制施行まで

大正九年十月二十一日熱海線小田原駅が開通した。熱海線はその後大正十三年湯河原まで延長し、翌十四年に熱海まで全通した。明治二十年以来待望の鉄道が敷けたのだから小田原町民の喜びは大きく、山車二十台を繰り出し、全町を挙げての祭が一週間にわたって繰り広げられた。

このように関東大震災の最中、最も被害甚大といわれるほどの大打撃を受けた熱海線は意外に強く、いくばくもなく新しい町作りのつち音があちこちに響いたのである。しかし、町当局は復興資金が無くその調達に非常な苦慮をしたものであった。

このころ、第二小学校は現在の警察署のところにあり、高等女学校は職業安定所一帯の地にあった。これを廃止となった御用邸内二の丸の払い下げを受けて移転し、それによって復興資金をねん出するということができたが、これが引き続いて現在史跡保存のための城内小学校移転問題として残っているのである。

小田原の復興の中で際立った進展を示したものは小田

原駅であったといっている。小田原駅には現在箱根登山鉄道、大雄山鉄道、小田急電鉄の三私鉄が乗入れている。

箱根登山はもと国府津湯本間の小田原電気鉄道であるが、これは熱海線小田原駅開設と同時に、国府津と小田原幸町、現市民会館前の路線を廃止し、市民会館前から駅までの線路を新たに敷設したもので、昭和十年駅に乗り入れ、小田原駅、幸町、板橋間を市内線とした。

大雄山鉄道は大正十四年小田原、関本間に開通し、昭和十年に駅に乗り入れた。小田原急行電鉄、略称小田急は東京新宿から神奈川県中央部をつらぬいて小田原に達するもので、昭和二年に開通した。

小田原駅はその後昭和九年に至り、丹那トンネルの開通により、従来の御殿場回りにとって代って熱海回りが東海道本線になると、いよいよ発展した。

この小田原駅の急速な発展はいったい何によってもたらされたか、いろいろ原因はあるであろうが、大正時代から昭和のはじめにかけて観光ということが新たに注目を集めてきたことも一つの原因があったと思

われる。

国際観光年記念行事協力会発行の「観光と観光事業」によれば、観光という語は大正時代にツーリズムの訳語としてにわかに普及した。

明治時代には漫遊という語が用いられていたが、大正年間に入って海外移住者とその子孫が団体で祖国を訪れるものが次第に多くなり、これらは祖国漫遊団とも呼ぶべきものであったが、新聞紙などはこれを母国観光団という表現で紹介するようになったという。

また大正七年にジャパン・ツーリスト・ビューローの北京案内所を開くに当って、中国人に理解し易い名称が必要になって、日本国際観光

光局という名を用い、昭和五年には政府は多年懸案の外客誘致の政策を打ち出し、その中央行政機関として、鉄道省に国際観光局を設置した。

そして、これがきっかけとなって、観光の語は飛躍的に普及し、観光客、観光地、観光施設、観光資源、観光事業などをはじめとして、観光ルート、観光道路、観光バス、観光ホテル、観光旅館、観光船、観光土産品、観光開発など無数の言葉が誕生した、と同書はいつているのである。

したがって鉄道省が鉄道経営の中で観光的色彩を強めて行ったことは当然で、昭和四年四月、鉄道省編、

大阪毎日、東京日々新聞社発行の「新鉄道唱歌」を見ると、それ以前の鉄道唱歌とちがって、沿線観光地を紹介する章句が多くなっており、この間の事情をよくうかがうことができるのである。

このような機運の中で各地方の名勝地、温泉地等がなんらかの対応を示さなければならず、小田原箱根においてもその例をいくつも見ることが出来る。

まず、大正二年小田原電気鉄道が貸自動車業を開始し、ついで大正三年には富士屋ホテルが富士屋自動車株式会社を創立して貸自動車業をはじめた。

富士屋自動車はさらに大



昭和初期の小田原駅前 市川健三氏所蔵



正八年六月に、国府津、箱根町間の乗合自動車の運転を開始した。これは小田原電気鉄道の登山電車に対抗するものであった。

一方、小田原電気鉄道は大正八年六月に箱根湯本、大正十年十二月下強羅と上強羅を結ぶケーブル線の営業を開始し、同年七月小涌谷、箱根町間の乗合自動車もはじめた。このほか大正三年には強羅公園も開設している。

さらに大正十四年には名さつ大雄山最乗寺と小田原とを結ぶ大雄山線がつくられ、昭和二年には震災後急激に発展した新宿と観光地箱根を接続し、あわせて沿線の開業を目的とした小田原急行鉄道の開通を見たのであった。

これらはすべて観光に關

連する対応の現われと見てよいと思う。

小田原駅を中心とするこのような交通の進展は自然町民の意欲を刺激し、復興に拍車をかけることとなったのは当然のことであった。そして、この前向きな姿勢は市制施行への願望を次第に具体的な形として現わしていった。昭和に入ってから、町が城跡を水の公園として整備し、町立図書館を作り、上水道を完成させたのもその在りであったといつてよいであろう。

また、昭和八年小田原町民を中核とし、足柄上、下両郡の有志者の協力を得て結成された小田原振興会は西湘地方の産業経済観光の発展を目的とするものであったが、その当面の重点施策は小田原市制施行を民間の側から推進しようとするこ

とであった。

かくして、小田原町は足柄町、大窪村、早川村、酒匂村山王原、網一色と合併し、昭和十五年十二月二十日市制を施行した。人口五万五千であった。

しかし、市制はしいたものの、戦争はいよいよ激烈となり、翌昭和十六年には太平洋戦争に突入したため、市政の動向は次第に戦時体制に切りかえられ、食糧増産、物資確保、防空対策等の戦時関係業務に重点が置かれ、他をかえりみる暇はなかった。その間に本市産業の受けた打撃はいちじるしく、これに加うるに市の中心部は戦災の被害を受けて昭和二十年八月十五日の終戦を迎えた。

大磯俳句めぐり

和田 登

島崎藤村の墓

終焉の碑

梅は実に藤村の墓
静まれり

鳴立庵、小田原のいろいろな主人崇雪が創建した庵(別荘)。「鳴立つ」を

虎御石、曾我十郎の虎御前の恋物語を大磯の宿場において思いおこすのは楽しい。

「死木立つ」とすると、西行の歌も大変なことになる。

夏瘦や薄化粧する
虎御石

・石碑の一字々々の
涼しけり

新島襄終焉の地、旅館百足屋に病を養うが、腹膜炎で死去。碑は徳富蘇峰の筆。

・涼風や鳴立つ庵の
小さき橋

送り梅雨新島襄の

・くさき世に清き庵の
鳴を待つ

・鳴立つは川上ならん
この濁り

・梅雨深し
鳴立つ沢の石洗う

・滄浪閣、伊藤博文は小田原に滄浪閣を建てる。後大磯に移る。今は飲食店になっている。伊藤博文は大磯に籍を移し大磯の人となった。博文は大陸で死んでいるがその時の出発地は大磯であった。

・滄浪閣大島近き
夏前海

・御神火の静かな煙
茗荷の子

・足柄上郡誌(復刻版)
足柄上郡編 千秋社刊
価七千五百円

・足柄下郡誌(復刻版)
足柄下郡教育会編
千秋社刊 価六千円

・牧野信一と結城信一
保科正夫著 宮本企画刊
価八百円

・報徳開頭 二宮尊徳生誕
二百年記念事業会報徳実行委員会編
有隣堂刊 価四千円
(小田原図書館、市内書店等調)

郷土関係の刊行物

昭和六十二年
七月〜十二月
◇おだわら
―歴史と文化―第一号
小田原市役所文化室編
AN ENGLISH GUIDE TO
HAKONE GENJI ITO 編

箱根町教育委員会
◇足柄平野の金次郎
岩本一雄著

◇小田原城内高等学校創立
八十周年記念誌
小田原城内高等学校編

◇企画展 箱根神社の歴史
と祭
箱根町立郷土資料館編
◇小田原女子短期大学三十
年史
小田原女子短期大学三十
年史編集委員会
◇西湘YBC創立二十周年
記念誌
西湘読売ブッククラブ
◇野山のたより
総集号(一〜一〇〇号)
箱根町教育委員会編
◇小田原の自然 第六号
しとどの会編

川柳

高井喜雄

バスガイド クイズを出して息を抜き
ハツ当り妻が一番当たりよし
あいさつの短い分だけ拍手わき
芸能界親は子供の七光り
敬老会準備したのもご老人

小田原地方の寺子屋(3) — 足柄地方庶民教育動向 —

高田 稔

- 内 容
- 一、庶民の読み書き能力(一三〇号)
- 二、寺小屋の登場(一三二号)
- 三、寺小屋とそのくらし
- 1、寺小屋師匠の身分(本号)
- 2、小田原藩士の武家師匠(本号)
- 3、小田原藩士以外の武家師匠(次号)
- 四、筆子の学習
- 五、寺小屋への就学率

三、寺子屋師匠とその暮らしの先頭に立っている。城下町小田原と足柄郷村の寺子屋師匠の身分はどうであったか。百二十五人の身分を集計すると次のとおりである。

- 武士 二〇人(二六%)
- 農民 二〇人(二六%)
- 僧侶 七三人(五八%)
- 神官 六人
- 医師 二人(七%)
- 石工 一人
- 不明 三人(三%)
- 計 一二五人

すなわち、僧侶が主力で、これに武士、農民が続く。これをさらに、年代別・身分別にして、師匠数の推移をみたものが次の(3)表である。

これをみると、寺院(住職)が享保以来明治に至るまでいつの時期も庶民教育

の先頭に立っている。寺院は江戸時代、寺請が法制化されて以来壇家一般の教育を含めて、生活万端の世話・保護或いは指導に当たってきたから、教場の確保も含めて寺子屋を開業しやすい条件が整っていた。特に、経済的基盤の充分でない小寺院にとって壇家の子弟だけでなく、他村からも筆子を迎えての寺子屋開業は有力な収入源でもあった。

また、宮台村(開成町宮台)の本光寺は、天明から慶応に到る約八十年にわたっ

(3) 身分別・年代別師匠数の推移

身分	武士	農民	僧侶	神官	医師	石工	不明
享保			1				
天明	1		3				
寛政			2				
享和			2				
文化	1	1	1				
文政	1	2	4			1	
天保	1	5	7				
弘化	2		3		1		
嘉永	2		1	1			
安政	4	1	4	1			
延享			1				
文久	3	3	4	1			
治元		2					
慶応	4	3	3	2			1
明治		3	10	1	1		2
不明	1		27				
計	20	20	73	6	2	1	3

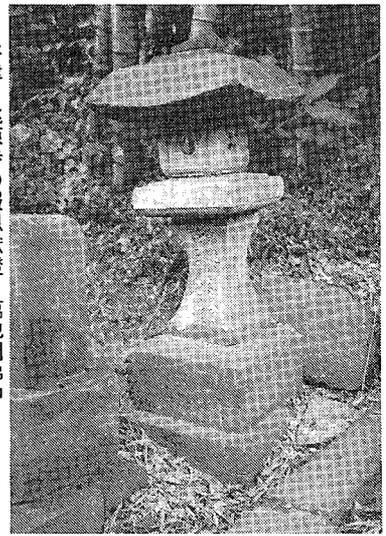
て寺子屋を経営しているが、天保期は飢饉による打撃で借財がかさみ、天保九年(一八三〇)近村曾比村(小田原市曾比)の旧筆子・劍持広吉らを通して家政立て直しを二宮尊徳に依頼、その報徳金(無利子五年賦)の貸付をうけるとともに旧筆子らの出金によって、ようやく借財返済を行っていった(『二宮尊徳全集』十七卷)。

このうち最古の開業は、横浜市の延宝七年(一六五七)のもの、これについて享保年間(一七二〇)の五か所、その一つが瀧門寺で、他は横浜市三か所、三崎市域一か所となっている。足柄地方において瀧門寺の寺子屋開業が十八世紀前半と、とびぬけて早いのは、岩村が特に近世に入って徳川氏の江戸築城に伴ってその特産の小松石を供給する石材業が確立していたためであると考えられる。

そして、すでに元禄期(一六八〇)からは築城た。彼らは経済難から救われるため、非番の余暇をもって手習いを教えた。小田原を遠くはなれた谷峨村(山北町谷峨)に寺子屋を開業した岡部義興の場合をみてみよう。

日本教育史資料によると、その開業年代は安政元年(一八五〇)から明治四年(一八七〇)まで、ここに学ぶ筆子数は、明治元年調で男子二十人であった。岡部は小田原藩士であるが、谷峨村開所の定番人であった。この開所の役人として御番士と定番人があつたが、御番士は小田原から一か月交替で駐在勤務した。定番人は「御定番」と呼ばれ開所付の家屋に住み、世襲であった。

岩村が特に近世に入って徳川氏の江戸築城に伴ってその特産の小松石を供給する石材業が確立していたためであると考えられる。そして、すでに元禄期(一六八〇)からは築城た。彼らは経済難から救われるため、非番の余暇をもって手習いを教えた。小田原を遠くはなれた谷峨村(山北町谷峨)に寺子屋を開業した岡部義興の場合をみてみよう。日本教育史資料によると、その開業年代は安政元年(一八五〇)から明治四年(一八七〇)まで、ここに学ぶ筆子数は、明治元年調で男子二十人であった。岡部は小田原藩士であるが、谷峨村開所の定番人であった。この開所の役人として御番士と定番人があつたが、御番士は小田原から一か月交替で駐在勤務した。定番人は「御定番」と呼ばれ開所付の家屋に住み、世襲であった。



谷津・桃源寺の報恩献燈 臨池門弟中

いる。その名を注意深く読むと、小田原の有力商人が多く数えられる。

臨池とは手習いの意であって、これは確実に筆子塚であり、松隈甚七に手習いの指導を受けた町人子弟の報恩の献燈である。

したがって、松隈家は恐らく天明期以来、藩士子弟の漢学教授のかたわら、寺子屋も併せ開業していたものと思われる。このことは同じ漢学塾経営者であった宇野氏・中垣氏においても同様であったのではないかと推測する。

小田原藩十四名のうち二名は女子師匠である。牟礼タキは牟礼兵衛の娘、拝郷いのは拝郷武矩の妻である。

江戸は別として、地方に女子師匠の進出がみられるのはごく稀のことであった。神奈川県全域全体をみても、

商業活動を充足させるためには、女子の労働力も必要とされ、それに必要な知識―少なくとも読・書の初歩的学習―の修得をめざして寺子屋への就学熱がたかまり、ために女子師匠が要求されたのであろう。

また、二人の女子師匠が藩士の妻女であったから、商家の子女にまじって武家の子女も多く通学したのではなかるうか。

牟礼タキが収容した筆子数は女子だけで百二十名(慶応三年) 県下に例をみない多人数である。その学習内容が不明であるが、恐らく読み書きの外に裁縫・家事・茶の湯・活花などを加えたことが、女子の就学熱を煽ったとも考えられる。

拝郷いのは寺子屋については、足柄県に提出された開業願が残っている(後述する)。

これには明治六年開業とあるが、実際には牟礼と同じころ(嘉永年間)にすでに開業していたと思われる。ただし、この拝郷の寺子屋「稚松学舎」は、その教則からみて男子の就学もばまなかったようである。

なお、もと小田原藩士であったものが、事情によって帰農し寺子屋を経営した例が二つある。

巨樹「タブノキ」がそり立つ久野の京福寺に、二基の筆子塚がある。二代にわたって寺子屋を開業した伊東久三良・亦五良父子の墓である。まづ久三良の筆子塚には、その側面に

「小田原家臣横山之姓本目流達人後閑居而久野村、俗名伊東久三良昌景之墓、師為報恩門人建之」とあり、亦五良のそれには「伊東亦五良昌茂止四十霜今秋欲赴臨終、嗚呼門弟兒

童欲深為師恩報依而石碑造立、有苔下露不少歎喜依而伸動発意也」とある。

その意は

「伊東久三良はもと小田原藩士で横山姓をのって本目流(享保期以降の書道の一派)の達人であったが、

のち久野村に閑居し寺子屋を開業された。筆子たちは師匠が死んだので報恩のためこの墓を建てた。その子

亦五良は引続き寺子屋を経営されたがわずか四十歳で死去された。その死を悼み師恩にむくいるため石碑を造った」となる。

伊東久三良が久野に移り住んだ理由は、子孫伊東良

文人ゆかりの宿

「養生館」

姿を消す

明治三十七年(一九〇二)に建てられ、小田原最大の旅館の一つであった養生館が、老朽化で二月初旬に取り壊されることになり、白秋、藤村、如是閑、吉井勇、三好達治、北条秀司ら多くの文人が利用した宿として、多くの新聞やテレビで取り上げられ話題をよんだ。当主の西村隆一さん(八五)

は、昭和二年の小田原城跡埋立反対同盟会や、昭年八年の北村透谷碑建設の、発

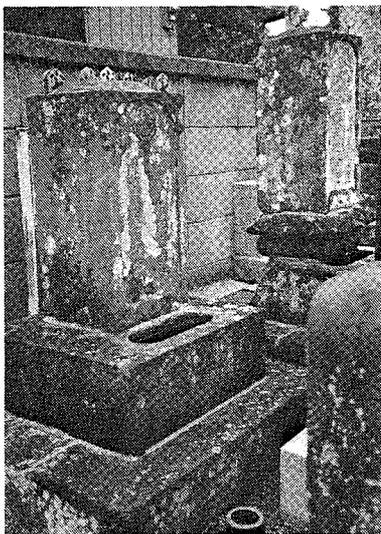
平氏によると、眼疾のためであったと伝えられているという。

一般に筆子塚は、師匠の法名・俗名・没年を刻み、台石に大きく「筆子中」と彫られたものが多いなかで、この二基は異例である。

この伊東父子に対する筆子たちの敬慕の念がいかに厚かったかを伺わせるのである。

栢山の農民師匠黒柳繁之助も、もと小田原藩士であったと伝えられるが、その詳細は不明である。

起人の一人として活躍もされた方である。また仲人親が白秋である。そんなことではいろいろな、資料、写真、話題を持っておられるが、目下、資料を整理中。いざ、会報にご紹介できるかと思われる。



久野・京福寺の筆子塚



小田原図書館と 古文書

川添 猛

小田原市立図書館長

一、はじめに

ちかごろは、図書館とは極く世間うけのする読みものをたくさん揃えて、気軽に借り出したりなどする利便性の高い施設と考えられるようになった。この傾向は、東京周辺の特に急激な人口増加による市街化の進んだ地域に目立つようである。ひところの学生の勉強するところという通念からみれば、世の移りかわりとともに、ひとつのもの見方やとらえかたにも、ずいぶん大きな変化があるものだと感心するむきも多いことと思う。

しかし、わたしたち小田原の図書館は、そういういま風の傾向とはちょっと趣きを異にしている。それはひとことではいえず、館自体の歴史が古い——といっても前身時代を含めてもわずか六、七十年といったところだが——こともさることながら、小田原という土地柄というの大きい関係がありそうである。

およそいまの時代感覚か

とで構成されている。内容は江戸時代後期のものに片寄ってはいるが、当地方の歴史研究には欠かせぬ資料群であり、特に関所や宿駅制度、助郷といった近世の交通史に関する資料の宝庫といった観さえるものである。

資料は片岡永左衛門さんからの寄贈である。片岡さんは、ご存知のかたも多いと思うが、明治末年から大正・昭和にかけての小田原郷土史研究の、いわば草分けに当たる存在である。また小田原町助役をはじめ、数々の要職を歴任している。優秀な資料が図書館に架蔵されるも、当然それを利用する人も、機会も多くなってくる。そうして新しい資料が波及的に集ってくるという、循環がはじまるのである。もともと古くて稀少な資料は、そう簡単に入

二、特別集書『片岡文書』の成立

小田原図書館が、古文書を扱うようになったのは、それもいつのことだろう。それは昭和八年の館の創立時の運営方針にまでさかのぼることができそうであるが、なんといいても「片岡文書」が特別集書として成立したことを忘れることはできない。開館四年を経た昭和十二年のことである。この「片岡文書」は、旧小田原宿片岡本陣に伝来した資料と、多くの地方文書

というのめずらしくはなかったのである。それも館の日常の仕事を一方で処理しながら、たった一人の仕事として行われていたことである。

約束の期限内にやっとな業を終えて、原本を返しに行ったところ、その苦心のほどを知った所蔵者は、大切にしていたその原本をあつためて寄贈してくれたというエピソードも伝わっている。

さて、昭和三十四年、市内矢作出身の星崎定五郎翁からの巨額の寄附金によって、待望の新館建設が実現する。星崎記念館である。この新しい図書館には積層式の耐火書庫ができたことが評価されて、以降は多くの所蔵家からの資料の寄贈が続いたのである。特別集書となつたものだけでも小田原有信会文庫、板倉文書、木村錦花文庫、牧野信一資料、山崎元幹文庫、藤田西湖文庫などである。なかでも、小田原有信会文庫の板倉文書は、もともと当地に

三、古文書調査の資料館

て、五万冊収容可能な書庫の四月には、内田哲夫、岩崎宗純、内田清の若手研究者二氏を調査員に委嘱して、いよいよ古文書調査活動がスタートしたのである。一方、この年代はあたかも国をあげての経済急成長のピークに当たっていた。われわれのまわりでも、鉄道や道路など公的開発の影響で、農村地帯は大きな変貌を余儀なくされていた。そういう嵐のごとき勢いにおされて、古文書・古記録の滅失もはなはだしく、土蔵を壊し、なかの古い器具や古記録類を屑同様に焼却している情景を、幾度となく目撃したのである。

こうした状況から、いまは緊急的にそれらを少しでも滅失から救うべきであり、もし他に所掌する部局や機関がなければ、図書館がその任にあたらなければならぬのではないかと、という発想がうまれてくるようになった。その結果、増設する書庫の一部に古文書を収納するスペースを確保し、さらにそれらの所在状況を調査し、収容する仕事を組織的に行う古文書調査員の制度を、館内に設けることになったのである。

昭和四十六月四月に資料館が完成し、小田原市立図書館の書庫は五万冊から十六万冊と飛躍的に能力を向

『小田原の近世文書目録』(1)~(5)には、そのすべてが登載してあるので、ご興味をお持ちの方はそれをご覧願いたい。

さてこの所在目録であるが、調査活動開始後七年目の昭和五十四年に、ようやく第一巻を刊行するはこびとなり、これには、資料がまとまって伝存する点では市内随一といわれる、旧府

今年が戊辰の年である。戊辰といえば、明治の戊辰戦争が思い起こされる。小田原藩も箱根関所と湯山崎で、佐幕派の遊撃隊と戦ったことはよく知られている。

しかし、かつての小田原藩主であった稲葉家の当主で、当時、幕府の老中であつた淀藩主稲葉正邦が、菩提寺の小田原市入生田の紹太寺で蟄居させられていたことは、余り知られていない。

まして、なぜ紹太寺で蟄居させられていたか、詳しくふれている史書を見ていない。

幸い、その間の事情を知る貴重な資料を、去年の暮京都の方が、私に送ってきてくれたので紹介したい。

資料は「稲葉神社文書」の一つ『歳寒松柏編』である。「歳寒松柏」の意味については後述するが、内容は、鳥羽・伏見の戦いから

川村の稲子家の近世文書を収録。その後諸般の事情から断続的とはなつたが、昭和六十一年三月には、ようやく第五巻を世におくり出して、一応の完結を見たのである。

この目録の刊行は、小田原の歴史を研究しようとする際には、益するところ大なるものがあるといふそかに自負しているが、また同時に

藩主正邦が、徳川慶喜の有名な「謝罪状」をもって上京するまで、精魂を傾けた藩士の手記である。資料は次の書出しで始まっている。

辰年(慶応四年)正月三日、徳川慶喜京に入ラントス、会桑二藩(会津

紹太寺に蟄居した

稲葉正邦

加藤利之

桑名両藩)前駆タリ、兵卒城下ニ充滿セリ、午前十時鳥羽ニ当り発砲ノ声アリ、午後四時伏見火起ル、コレヲ戦争ノ始トス

淀城は、京都の南を固めるために、幕府が伏見城を廃して、代わりに構築した

に、このたびの古文書調査事業の報告書としての意味も果しているものと思つている。

一方目録刊行がはじまつて翌年、こんどは一般市民むけの報告書ともいふべきものとして『江戸時代の小田原』の刊行を計画した。執筆はもちろん調査員の三人が当たつたが、調査結果を踏まえた新しい史実も折込

城で、京都の二條城と大坂城を結ぶ、徳川幕府にとつて、最も大事な防衛ラインであつた。

しかも、時の淀藩主稲葉正邦は、幕府の最後の老中で、その前年、初の国内事務総裁に任せられるほど、徳川慶喜の信頼が厚かつた。

世上混とんとしてきた幕末とはいへ、幕府にとつては最も信頼のおける藩であり城であつた。

慶応三年(一八五七)十月、慶喜は大政を奉還し、一旦大坂城に退いたが、薩摩藩の挑発に、ついにたまらず

「君側の奸を排す」の翌慶

んだ、やさしい概説書と云うのが当初の意図であつた。

いよいよ本が完成するとかねてのもうみにしたが、小田原市公益事業協会から発売、初版五千部が三ヶ月で品切れとなり、すぐ二千部の増刷までするほどの好評を得ることができた。これはまったく予想外のことであつた。

会津、桑名の兵を先鋒に一万五千の大軍が京に上つた。本宮を淀藩の藩校明親館におき、淀城下に宿泊した大軍は、翌三日、鳥羽と伏見の両街道に分かれて進軍していった。「兵卒城下ニ充滿セリ」は、まさに、このときの淀城下の様相である。

その淀藩が、僅か二日後城門を固く閉じ、敗走する幕府軍を見殺しにしようとは、淀藩士の誰一人思いもよらなかつたことであらう。

鳥羽・伏見の戦いに敗れた幕府軍は、当然のように淀城に入つて、態勢を立て直そうとしたが、淀城は門を固く閉ざし、強いて入ろうとする幕府軍に対し、城兵は「銃及槍ヲアツメ拒ンデ入レズ」という有様で、幕府軍は止むなく、城下に

五、むすび
古文書調査員制度はいったん休止、所在目録もそれまでの成果をほとんど余すところなく収めて完結したが、小田原市立図書館の古文書に関する仕事は、いぜんとして終わらない。それはひとつには、資料が現存すればかならずその保全と活用が仕事となるからであるし、またその後もあらたに

火を放つて南下していかざるを得なかつた。

なぜ、淀藩が急に勤王に転じたが、資料には記されているが先を急ぎ藩主正邦の紹太寺蟄居の本論に移りたい。

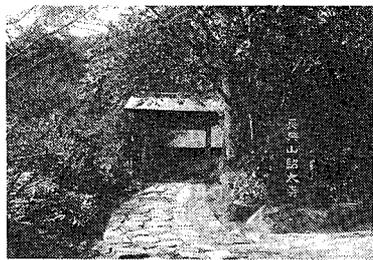
この時、藩主は江戸にいた。淀城では藩の状況を早く江戸の藩主に報告しなればならない。目付役の石崎郁蔵が江戸の藩邸に急行した。

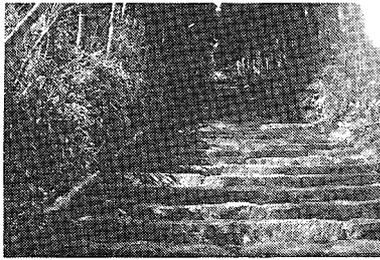
直チニ邸ニ昇ル、君(藩主正邦)ニ調シ、具ニ上申ス、問ヒアレバ随ッテ対フ、而シテ君憤温(いきどおること)ノ色アリ、大儀の言バナシ

普通ならその労をねぎわい、「大儀であつた」というはずが、「憤温ノ色」というのだから、淀藩が幕府軍を見殺しにしたことについて、藩主正邦は老中だけ

に、心安かざるものがあつたことが分かる。実は、正邦はこの報告前に、淀城のことは知っていた。それは「幕府軍敗る」の報せを聞いて徳川慶喜は、さささと大坂城を脱出し、軍艦に乗って江戸城に逃げ帰ってしまったからである。資料にはこう書かれている。

鳥羽・淀ノ戦ヒ、徳川ノ兵敗績スト、田辺氏(家老田辺権大夫)精兵





稲葉正邦の小姓宇式直が吉報をもつて上つていった紹太寺の階段

ヲ撰ミ、引卒シテ応援セント、邸中精撰シテ数十名ヲ得タリ、將ニ発セントス、時ニ慶喜公掃城ノ報アリ、是ニ於テ止ム、主君即時ニ登城シ、淀戦争ノ状ヲ略知セラレ、憤慍ノ色アリ、幾日ナラズシテ石崎郁蔵来リ上申ス、然レドモ慍ヲ含ミ、釈然タラザルナリ

江戸城に入った慶喜は、和平派の旗本中心に政治体制を切り替えた。老中も次ぎ次ぎに辞任し、正邦が最後の老中として唯一人残った。

しかし、朝廷は一月七日慶喜追討令を発し、二月九日には、有栖川宮熾仁親王を東征大総督に任じた。この段階で、慶喜もついでに

稲葉正邦の小姓宇式直が吉報をもつて上つていった紹太寺の階段

に恭順に決し、二月十二日上野寛永寺に謹慎したが、東征軍は二月十五日京都を離れた。このままでは、徳川家の存続も危うい。慶喜は朝廷に謝罪状を差出すことになった。しかし、慶喜に代わって謝罪する謝罪使の大任を引受ける太名はいなかった。大任はついに最後の老中稲葉正邦に下った。鳥羽・伏見の戦いの不首尾を気に病んでいた正邦は、喜んで引受けたようである。

こうして正邦は、二月二十六日江戸を出発し、翌日小田原に着いた。しかし、ここで早くもつまづく、「旅装騎従(とも廻り)平常ノ如シ」というから、参勤交代のときの供勢を引きつれていたのである。既に小田原に着いていた東征軍の先鋒にとがめられた。

美濃守殿(正邦のこと) 多人数召シ連レラレ、加之武具等多分爲持ララル段、如何ニモ疑ハシキ次第ナリ、供勢并ニ武具等減少致スベシ

このため歩兵三十人と小銃若干を江戸邸に返し、銃はさらに長持に入れたりして、二十八日小田原を立ち、三島の宿に着いた。しかし、さらに難題が待

ちかまえていた。薩摩の兵村田善平なる者が来て、大総督有栖川宮の命を伝えた。美濃守多人数引卒シ、徳川慶喜ノ爲歎願書ヲ携帶シ、其他疑ハシキ件之レ有り、且小田原駐シアリテ謹慎スヘク旨ヲ達ス、然ルニ敢テ当駅ニ宿スルニ至ル、総督ノ命如何ントナスヤ

しかも、明日は長州勢が来るから早々に立退けという敵命である。止むなく引き返すことにしたが、京都への道は開かなければならぬ。正邦は小姓の宇式直を呼び、川俣右門(家老)に随行し、西郷吉之助と交渉するように命じた。二人は西郷が沼津にいることを知り、嵐の中を「濡れ風」になって行ったが、会うことはできず、先鋒の兵から

美濃守殿謹慎ノ命を蒙レリ、該家来ナル者一人タリト雖ドモ通行スルヲ許サズ、今三島駅マデ敢テ来ル、命ヲ用ヒサルナリ、小田原駅ニ退ヒテ朝命ヲマツベシ

途中「小田原駅官軍入込ミニテ、旅館ツカエアルベク、幸ニ菩提所長興山ニ至リ旅宿ト申シ」といい、入生田の長興山紹太寺で謹慎することになった。これが正邦謹慎の裏面史である。どんなに無念であったか、議論は百出したという。或ハ僧侶ニ擬装シ京師ニ至リ、常上方ニ依頼セント、或ハ江戸ニ帰り、官軍ヲ拒ミ、潔ク討死セント云フモノアリ

という状況であった。しかし、正邦は「徹頭徹尾君臣ノ道ヲ尽シ、慶喜公ノ歎願ヲ貫カント」した。小姓、宇式直は「歎願を貫こうとしても、今の官軍の勢いでは無理だから、歎願書は返却して、まず入京しそこから道を開くよう」進言して入れられる。

これが公式には、慶喜の歎願書は焼かれたとされているものである。ここから、正邦の上京許可を得るまで、宇式の奮闘が続くが、本論ではないので、省略させていただく。宇式の努力により、正邦の一行は、三月十四日寅ノ刻に長興山を発ち、二十四日に京都妙心寺の菩提所隣祥院に着いた。「主従共ニ恙ナク、歡喜ニ禁ヘス」と

手記は結んでいる。結果的に慶喜歎願の目的を果たせなかった正邦の、上京の意義について論ずることは控えたい。最後に、資料の題名である「歳寒松柏」についてふれたい。出典は論語の子罕編である。「子曰、歳寒、然後知松柏之後彫也」(子曰く、歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後るを知る也)寒い冬になって、始めて松や柏の葉がしばまないことに気付く。人間も困難に遭遇したときに、始めてその人の価値が分かる、という意味である。(箱根町立郷土資料館長)

兵隊ごぼれ話

西山銈太郎

床屋の露店 「何処の国にも露店があり、被服類や菓子・果物等を売っている。又何々市の植木等日本では大変に親しみ易く、幼時から何回となく見て来た。然し如何に露店の多い日本でも、床屋の露店だけは見た事はなかった。それがこの窓(私の居室)の前の大きな並木の涼しい処を選んで台を据える。すぐに客が来て白い掛布を首に巻きつける。床屋の露店：日本では見られぬ風景である。」

我が郷土の 我が家の年中行事(7)

西山銈太郎

三十八 えびす講
十月が神無月でえびす講だが、田舎では一月おくれで十一月二十日に行われて来た。えびす様は金もうけの神様だと云って、商売をしてる家では厚くお祭りをした。

明方には帽子の上に着が白く降りてた位なのに、子供等は一年に一度のえびす講が楽しみだった。昔の事だから勿論和服で下駄、我が家では此の日から足袋をはく事を許された。足袋と云っても此の春の穴のあいたのを繕った古いので、新しいのは元日からだった。

農家でもえびす講をやった。二十日の朝早く神棚の恵比須さんのお宮をテーブルの上を下ろし、お燈明を上げ、数日前から準備してた甘酒や赤飯・煮メ・みかん・柿等を供えた。初冬の寒い中を二時間程も歩いて来た後の舌をやく様な甘酒の味は、今も昨日の様に思ひ出される。

十一月は農繁期なので、農家では一月十日にも祭った。事は既述の通りだが、やはり十一月よりは簡単だった。それさえも更に簡単になりつつある。

十二月八日は又目一つ小僧の日である。年中行事を一月から書き始めたからこ

れは「又」となるが、目一つ小僧の日としては、これが第一回目とも云うべきだろう。目一つ小僧に入れない予防策やその他の行事は、総て二月八日の時と同じである。

四十 すすはき
すすはきは、農作業が一段落した処で行われる。家の前に庭を敷いて、布団・たんす・畳・障子・襖・ガラス戸から棚の物迄全部がらす戸から棚の物迄全部神棚のお宮さん迄外に出した。我が家の大神宮さんは源蔵叔父が木工の年季が明けた明治時代に、その記念に作ったもので、総けやき本格的な神宮で、重量は米一俵あつたと云つてた。

これを一人で始末するのだから、もう大正時代から勾欄を始め外側の飾りは殆んど取れてしまつてた。

その中に竹藪から切つて来た四本の笹竹(男竹)を二本宛束ねて、天井から各部屋の中を十分にすすやくもの巢を引っ

宗我神社の歳
宗我神社の境内で、二日十日宗我神社境内で、灯火を使わないでたそがれで行われた。人々は農作業を一寸早めに終つてだるま・正月用品を買いに行つた。子供等は五銭か十銭位を貰つて遊びに行った。

我が家は幕末から明治の初めにかけて没落してしまつた。小作をし借金をしては質入れされてた田畑を買い戻して来た。私は子供の頃から食べる物を貰うのは、とても勿体ない無駄づかいの様に思つて来た。或年の市に貰つた五銭で百人一首の本を買つて来た。前の家の五・六歳年長の娘さんに見せたら、もうカルタ取りを研究してたらしく、終りの方の練習法を熱心に読んでた。

大正十一年五月下旬宗我駅が設置された。間もなく歳の市は宗我神社から駅前へと移り、夜の十時過ぎ迄も賑わう様になった。そして何時の頃からか十二月二十四日に固定された。

四十三 門松
十二月三十日には屋敷内の最後の掃除をする。山から松の枝を取つて来て必ず今日中に門松を立てた。戦後国家神道の廃止と、更には神道への追討ちをかけた「資源の節約」なる美名の下に門松廃止が奨励された。随つて今日では恐らく門松を立てる家はない。どうかすると商家が景気づけに立てる位のものだ。

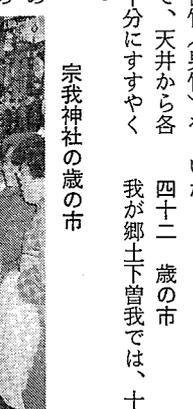
門松が立つと如何にも正月を迎える準備が出来た様な気がなつた。

四十四 もちつきとおかざりづくり
三十日には餅つきとお飾り作りをする。元日に使うお供餅を作り、お飾りを作

すすはきの掃除そのものは大した事はないが、農家では家は広いし一夫婦だけの事は殆んどない。家具や荷物の出し入

宗我神社の歳の市

宗我神社の歳の市

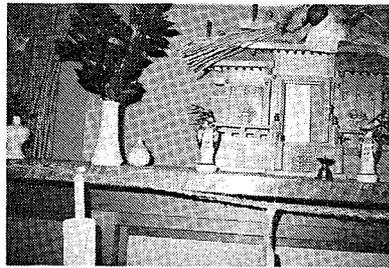


て神棚その他へ飾りつける。明日になってでは一夜飾りと云って極端に悪んだ。我が家の父は働き者だったから、夕方から餅つき。お飾り作りを同時に始めた。かまどの上の丸い「はやぶかし」のもち米が蒸ると三臼を続けざまにつく、次の三臼が蒸る迄の間に又お飾りを作った。我が家ではもちが少なくても二斗以上はついた。そして夜おそく迄かかった。

私が小一人前になってからはお飾りも餅つきも手伝った。私は父の様にうまくお飾りは出来ない。「可笑しきやお飾り見て笑へ」と云うからどんだって構わないと父は云った。やがて父はお飾り作り、私は餅つきをやる様になった。私が軍隊に現役兵として入った二回と戦争中の応召とで九回の正月を一人で迎えた父は、さぞ大変だったろう。戦後私が帰還した時には、すっかり老いた六十六歳だった。



歳神さんの飾付



大神宮さんの飾付

戦後帰還してからは私一人でやる様になった。私は祖母や母が「余りおそくない中によろう。」と云うのをいい事にして、午後から新聞等を見ながら餅つき、終ってお飾り作りをやった。餅つきは今では機械なので女の仕事になってしまっ

た。この餅は正月は毎朝雑煮で、或はその他で食べるので正月中食べるに足りない。又足りても必ず一月下旬中には若もちと云ってついた。この時お供餅を一飾り作って歳神さんに上げた。我が家では正月用の餅を暮に、一月の若餅、三月三日のひなまつり、田植え、いきみたま、お盆、祭礼には必ず、その他にも随時ついて食べた。

四十五 大晦日

今年もいよいよ今日限りである。お飾りが飾られると何だか浮々して来る。もう半分正月になった様な気分である。(門松があれば申し分ないが)農家では一年中何かしら仕事があるが、今日は余りおそく迄仕事をするなよとよく父に云われた。

夕食は申す迄もなくみそかそば。神棚へは先日歳の市で買って来た真新しい白木の膳とズツキを使用し、お燈明も上げる。これでもうすっかり正月になった様な気分になり、慌しかった年末を省みて何とはなしにホッとする。

今夜は早く寝ると白髪になってしまふと云われた。祖母や母はおそく迄正月の御馳走を作った。又我が家では昔からみかん畑に蒔玉玉があったので、こんにゃくを作った。

蒔玉を細かく刻んで十分に蒸かし、臼に入れてつく。あきる程につく。よく

西相模の石造物(6)

湯河原町鍛冶屋の道祖神

道祖神には、色々な形のものがあるが、この写真には、湯河原鍛冶屋の宮渡橋のもとに祀られているものである。

酒匂川の流域や、その周辺部に多く見られ双体僧形立像合形スタイルと型が小田原市風祭、箱根町山崎に見られる。

(岡部忠夫)



つけたら湯を少し入れてはつき、又入れてはつく。これを何回もくり返した。よくくつけない中に湯を入れると、又は一度に沢山入れるとフツツッが出来てしまう。十分にフツッしたら木鉢に移し、石灰を水でといいてその汁を入れ、手早くかき混ぜ、弁当箱や羊かんを流し器に入れる。暫くして適当の大きさに切つて茹でる。そして一同で試食をする。

一段落すると夜食になる。ああ又一年終つたかと思いつつ床に入る。慌しかった今日の明日はすでに来年である。

四十六 民俗行事

家庭に於ける民俗行事は主婦に依る伝承の可能性が強い。私の長女は非農家に嫁したが、我が家で正月三に嫁したが、我が家で正月三日は丸切り大根の雑煮で育ったので、今でもそうでなければ気持ち悪いとてその様にしている。

我が家では割合にそれ等の行事が守られて来た。我が家の五代前の玄曾父源蔵の妻クマは市内上町真壁家の娘である。その娘ツヤは国府津長谷川家に嫁し、その次男倉次郎は私の祖母トメの夫となった。トメはその祖母クマに育てられた。ツヤの長男には、子供は娘一人だけだった。その次女が私の妻となった。我が家は上町真壁家の女系とも云える。随つて我が家の行事がよく伝承されて来たのは、当然とも云うべきである。

民俗行事は往古より自然に発生して来たものであり、人々に守られながら人々を心豊かに護つて来た。戦後は逐次忘れられ勝ちであるが大変に惜しい事である。人間社会は理屈だけでは砂漠の様なものだ。民俗行事のある処人間にあたたかみとやすらぎとを与えて呉れる。何でも理詰めに解いてみようと思ふ人々をも、人間らしい人生に立戻らせて呉れる。受験勉強に追い立てられてる青少年の心にもゆとりを与えて呉れる。ギスギスした世相であればある程これ等行事を大切に、保存伝承すべきである。そして総ての人々がうるおいのある生活、大らかな人生を送つて欲しいものである。

(終り)

江戸後期の旅行ブーム 「大山詣り」

一九八八年昭和六十三年の今日、世上は空前の旅行ブームである。今からおよそ一八〇年昔の文化文政時代の江戸、京、大阪も亦おなじように旅行ブームが湧き立っていた。江戸期もこの頃になると都市における商業経済は極点に達し、江戸は町民文化の爛熟期を迎えていた。吉原遊廓や岡場所が繁昌をきわめ、狂歌川柳が流行し、歌舞伎が庶民大衆の人気を惹き、講釈、落語を興業する「寄席」の数は江戸市中に二百軒を越えたと言う。

まさしく江戸庶民の遊び文化は最盛期に達したのである。江戸開府以来二百年に亘る鎖国と平和は、農村

の窮乏化、武士階級の衰退を尻目に町人文化の花を、見事に開かせたのである。そして庶民の日常性からの脱出願望は、一大旅行ブームとなつて、野遊び神仏参りから始まって、江戸を離れて遠い他国へとそのエネルギーを拡げて行つたのである。

お伊勢参りはこの時期よりもつと以前から始まって、世に言うおかげまいり、ぬけまいりが流行したが、化政期には伊勢参りだけでなく、京大阪見物、こんびら参り遠出となった。その中で伊勢原の大山寺阿夫利神社参詣は手近かではあり、信仰心をも満足させるので、化政期には江戸庶民遊覧の

最適コースであった訳である。さらにこの大山詣りを盛んにさせたのは、大山寺先導師(おし)らによる講中の結成、講中を通じてのお札配りが大きな役割を果たした。大山詣りには江戸市中長屋住まいの下層市民までを講中の一員として動員した。当時「寄席」で語られた「大山詣り」がよくそれを示している。今、この「大山詣り」の梗概を記してみよう。

これでもうやら無事大山に着いた。そしてゴマも焚いて家内安全を祈つた。サアテみんな一っぱいやろうぢやねえかー

—これでどうやら無事大山に着いた。そしてゴマも焚いて家内安全を祈つた。サアテみんな一っぱいやろうぢやねえかー

—いやとんでもねえ事になった。大山を無事おつとめてナ、帰りに江の島の弁天さまにお参りしようとう舟に乗つたまではよかったんだが、折りから急に大浪が来てナ、舟はでんぐり返る。俺一人は助かったが、みんなはお陀仏よ。それで申し訳な

—おい、八の野郎をからかすてやれ。

—おいは、八の野郎をからかすてやれ。

—おいは、八の野郎をからかすてやれ。

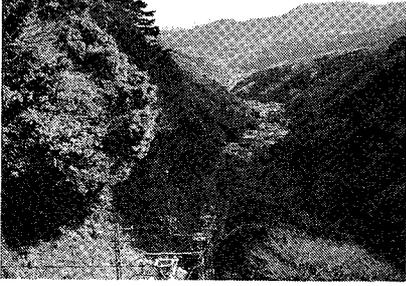
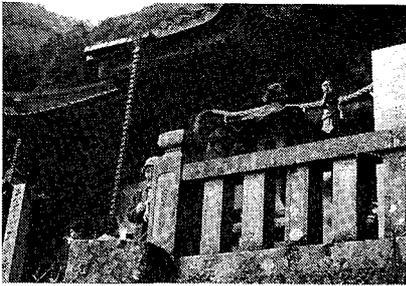
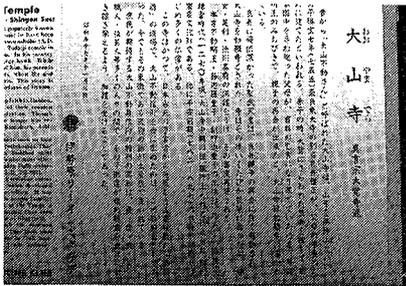
—おいは、八の野郎をからかすてやれ。

—おいは、八の野郎をからかすてやれ。

—おいは、八の野郎をからかすてやれ。

—おいは、八の野郎をからかすてやれ。

—おいは、八の野郎をからかすてやれ。



大山寺 不動明王 国重文指定

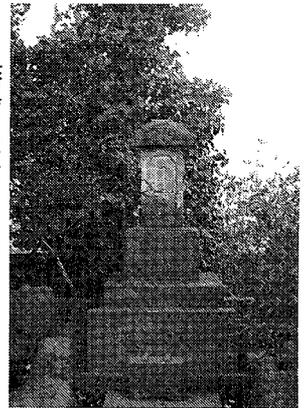
大山寺

大山寺より望む

あさだ旅館にて



上槽屋・道灌塚



上行寺 宝井其角の墓

大山初詣 昭和六十三戊辰年 真壁敏男画



初詣大山

和田 登

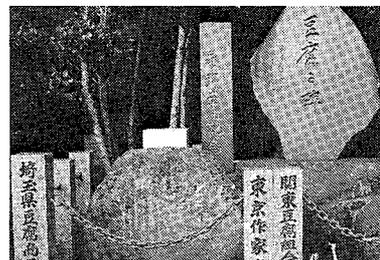
初電車風雲の富士まぶしけり
冬深し摩滅はげしき道しるべ
八方の大山道や春近し
厳寒の急階段や独楽の里

独楽の絵の石段おりて豆腐汁
空っ風江の島の海のぞき見る
阿夫利社の小鹿のふんや霜に枯る
石段の手すりにすがる初不動
枯れ大木道灌塚の冬夕日
道の奥其角の墓に氷る風

大山阿夫利神社の豆腐塚

白い四角の豆腐を頭に乘せられたこの豆腐塚は、大山阿夫利神社下社拜殿の左側に鎮座している。飄逸なこの口上は「蕃尿譚」でデビューした往年の火野葦平をほうふつとさせるものである。なおこの豆腐塚は全国豆腐組合が建立したもので、そのユニークな姿と口上は見るとして微笑を誘わずにはいられない逸話である。
(泉)

とうふ塚
口上
「あさくさの子供」の作家、長谷健冥府に赴いて、豆腐院此処何処白猿居士と



なる。朝昼晩の豆腐はまさ
に童顔酒徒の鎮魂
豆腐を頂かせて塚を設く
昭和三十四年五月十七日
火野葦平 撰並書

みちのくの秋

時田満子

十月二十二、二十三日 晴、女六人の奥の細道。
大好きな鎌吉をつつしんで、吟行三昧にはげんだ
幼ない五句
海に向く遍路の塚や返り花
回廊に黒猫ひそと時雨来る
秋の風封人の馬具かげりけり
国分寺の礎石まばらや草の花
息とめて書くこけしの目秋澄めり

今は昔

小田原サノサ節

狂歌山人作

おぼろ夜の

柳かすめる宮小路

ヨイトサツサ

遙か彼方はネー

千度小路

松の 宮居に鈴が鳴る

サノサ

夏の夜の

空を焦して大松明

ヨイトサツサ

沖の暗さにネー

涙おとし

線香よーしかネ

線香よーしかネ

線香のけむりに祈るひと

サノサ

今は千度小路の喧噪も早川漁場に移り、宮小路の柳も一本切れ二本切られて姿を消した。夏の夜空を飾る大松明の行事だけが、漁師の町小田原の佛を細々と伝えるだけになってしまった。



地名を歩く

春日山城

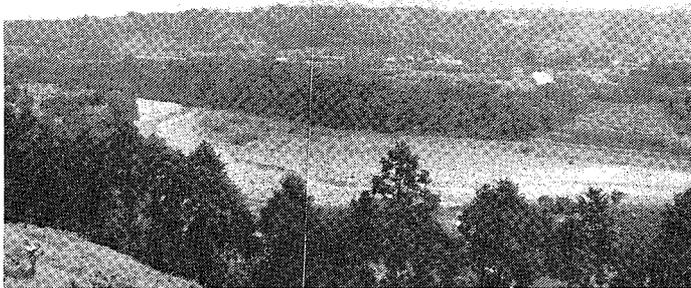
岡部 忠夫

春日山城という上杉氏が拠った越後高田のほうに世に知られているが、南足柄市内山にも春日山城がある。内山のもものは大森頼明が駿河から相模に進出してきた折、初めて築いたものといわれている。岩流瀬橋から眺める城跡は、とても貧弱で、一見、丘といったのが適当と思われる程である。丘に登ると発電所の水路が通っているだけで、往時の面影は全くなく、中世の山城のイメージとは全然結びつかない。ところが、北東側を流れる酒匂川の川底をのぞきこんだとき、はじめて、これは城塞の役割をしたのだ、という感じがしてくる。太古から川の侵蝕によって出来あがった険しい崖は、人がよじ登るのは至難の業である。南側には内山川が流れ、城としての役割を果たす地点が選ばれた訳である。南西には空堀が作られていたと考えられている。

春日山城という上杉氏あり、一見、河村城のが戦術的に有利な場所に位置している感じがするが、まだ弓矢の時代で射撃外にあり、この春日山城が築かれることによって、河村城の威力は大分いなされたのではないかと思われる。大森氏が相模に進出する際、河村氏を押しやるための戦略上の拠点としたとする見方は、成程と頷ける。

この山名の由来は、風土記稿によると、春日社が祀られていたので名付けられるようになった、と記している。高田の春日山も同じで、守護の上杉房定が先祖である藤原氏の氏神を十五世紀後半勸請したことに始まる。大森氏も藤原氏の後裔(土豪という見方もある)で、藤原氏の氏神である奈良の

春日社の分霊を、この城塞を築いた折に勸請したものと考えられる。ところで、春日の語源については、次のような解釈もある。カはスカの接頭語で、スガはスカと同意義の洲処であり、奈良の春日社のある所は、典型的な砂礫質の土壌であると。どういふ訳か、大森氏の築いた春日山城も砂礫質の台地上にあるが、それは偶然の一致であろう。



河村城側より見た春日山城

